

地震の教訓 外国人に発信

留学生の立場から熊本地震の教訓を伝えようと、熊本大(熊本市中央区)の留学生たちがプロジェクト「KEEP」と名付けた取り組みを続けている。地震直後から外国人の被災体験などを発信、活動の範囲は県外にも広がっている。帰国などで地震を知る留学生が減少する中、果たす役割は大きくなっている。

「KEEP」は、地震後間もない2016年5月、熊本大で学ぶ留学生5人で発足した。異国の地で大地震に直面した外国人たちの悩みや混乱を記録

「言語の壁」直面 英語の情報必要

し、課題などを今後に生かすためだった。

「どうしてよいか分からなかった。発足時のメンバーでミャンマーから今年3月末まで留学していたカイ・ザイ・ウィン・ミンさん(33)は、地震発生時の心境を語った。カイさんは前震の際、自宅アパートにいた。「どうしよう」と困惑したが、同じアパートに外国人はいない。同郷の留学生宅を訪ね、

今後の地震の際に
外国人の支援に
なりうることは？



隣の日本人に避難先を聞いた。避難所となった大学の体育館で本震に遭遇。体育館は避難者であふれ、入りきれない留学生もいたという。

地震の情報を得る際、「言語の壁」に直面した留学生は少なくない。「KEEP」は、地震体験などをまとめた外国人向けの冊子を千部作り、インターネットでも配信した。その際、留学生25人に実施したアンケート調査では、「今後地震が発生した際、何が外国人に必要なか」との質問に対し、80%が「英語の情報が必要」と回答した。避難所で得た情報や支援はすべて日本語で、理解できない留学生たちは苦境に陥った。不案内な日本語の情報がかえって不安を増大させ、パニックに陥ったケースもあったという。

その一方で、言葉の壁を破ろうと努力する姿もあった。フランスさん(30)「パプアニューギニア」は、避難中に片言の日本語と英語、ジェスチャーで意思の疎通を試みた。「大丈夫？」

県外でも講座 防災マップ作る

という日本人からの声掛けがうれしかった。

フランスさんらメンバーは、宮崎や佐賀など県外にも出向き、留学生らに対してワークショップを開くなどしている。学生たちには「地震が発生する確率は小さい」「避難訓練にも参加しない」と、地震を人ごととしてとらえる意見も目立つという。

地震から3年。地震を体験した留学生は減っている。メンバーも3人になったが、今後もプロジェクトは続ける。「経験を生かして留学生向けの防災マップを作ってみよう」。大規模災害が多発する日本で暮らす外国人の安心に一役買ってもらいたい。(藤山裕作)



熊本地震の体験を発信している熊本大の留学生たち(熊本市中央区)

今年2月、宮崎市であった外国人支援のための防災講座で講師を務める「KEEP」のメンバー(提供写真)